

## 人口減少・子育て支援対策調査特別委員会会議記録

人口減少・子育て支援対策調査特別委員会委員長 佐々木 努

- 1 日時  
平成 30 年 1 月 11 日（木曜日）  
午前 10 時開会、午前 11 時 50 分散会
- 2 場所  
第 2 委員会室
- 3 出席委員  
佐々木努委員長、佐々木宣和副委員長、関根敏伸委員、小野共委員、名須川晋委員、  
佐藤ケイ子委員、千葉伝委員、柳村岩見委員、千葉絢子委員、工藤誠委員、  
高田一郎委員、木村幸弘委員
- 4 欠席委員  
なし
- 5 事務局職員  
熊谷担当書記、須川担当書記
- 6 説明のため出席した者  
なし
- 7 一般傍聴者  
なし
- 8 会議に付した事件
  - (1) 調査  
「ひとり親家庭・子育て支援は未来と地域の万能薬」
  - (2) その他  
次回の委員会運営について
- 9 議事の内容

○佐々木努委員長 ただいまから人口減少・子育て支援対策調査特別委員会を開会いたします。

これより本日の会議を開きます。

本日は、お手元に配付いたしております日程のとおり、「ひとり親家庭・子育て支援は未来と地域の万能薬」について調査を行いたいと思います。

本日は、講師として特定非営利活動法人インクルいわて理事長の山屋理恵様をお招きしておりますので、御紹介いたします。山屋様の御略歴につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。本日は、「ひとり親家庭・子育て支援は未来と地域の万能薬」と題しまして、家族のカタチにかかわらず、誰もが生き生きと暮らしていける包摂さ

れた社会の実現に向けた取り組みについてお話しいただくこととなっております。山屋様におかれましては、御多忙のところ、このたびの御講演をお引き受けいただきまして、改めて感謝を申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、山屋様、よろしくお願ひいたします。

○山屋理恵講師 おはようございます。きょうは、このような場にお招きいただきありがとうございます。特定非営利活動法人インクルいわて代表の山屋と申します。きょうは1時間ほど時間をいただいていたので、私たちの活動についてお話しさせていただきます。

早速ですが、資料が盛りだくさんですので、座ってお話しさせていただきます。まず、自己紹介をさせていただきます。私たちの団体は、東日本大震災津波の発生した平成23年10月に設立しました。ビジョンは、ここに掲げてあり、先ほど御紹介いただきました「家族のカタチにかかわらず、誰もが生き生きと暮らしていける包摂された社会の実現に向けて一緒に活動する」です。ここには、子供の貧困、ひとり親という言葉はありません。この社会を実現するためには、大変な人たちを放っておいてはそういった課題が実現できず、一番大変な人たちを真ん中に置き、誰も排除しない社会を目指す取り組みをしていこうということでビジョンを掲げました。包摂という言葉は少しかた苦しい言葉ですが、反対の言葉は排除です。排除の反対が包摂というと皆さんに御理解いただけるので、インクルージョンやインクルーシブから名前をいただいてインクルいわてにしました。

こういった社会を目指す活動をしようと思ったのは、東日本大震災津波で私たちの岩手県が大変なことになり、支援の現場で私やメンバーが集まった際に、本当に大変なことが起きた、みんな大変だけれども、今一番支援の手が届かない人たちはどんな人たちだと思うとメンバーに言ったところ、そのとき集まった全員がひとり親と言いました。そこにいた、弁護士、助産師、困窮者支援者、元学校の先生など支援の現場の第一線にいた人たちが同じ言葉を発しました。

東日本大震災津波でひとり親になった世帯が500世帯以上生まれました。そういった人たちを真ん中に置き、手の届く支援をつくらなければ、社会が大変なことになります。しかし、この人たちと自分たちだけが頑張ったとしても、受け入れがなければ社会や地域で排除されることに何も変わりません。そこで、社会や地域を巻き込みながら、全ての人が一緒に参加する社会をつくっていこうということで団体をつくり活動することにしました。

柱は3つです。子育て支援と、その親御さんたちや子供たちの未来の就労支援、子供たちやお父さんやお母さんの悩みなどを解決する生活支援です。3本ではバランスが悪いので、一番大事な地域連携を入れて活動を始めました。

活動実績は、直近3年間をお手元の資料に記させていただきました。全てお話しすると時間がないことから、一番大きな話題を挙げさせていただくと、3年前に政府主催の消費

税の点検会合で、官邸にいろいろな代表の方が呼ばれマルだバツだというときに、岩手の子供支援の被災地代表として、私たちに声がかかり行ってまいりました。宮城県は女川町長がいらっしやいました。こういった場に呼ばれることも初めてで本当に緊張しました。これを言うといつも笑われるのですが、覚えているのは官邸の広さと、トイレの広さがすごいということです。議事録を見るときちんとお話しできたようなので、よかったと思います。このときにいろいろなメンバーが集まってつくった資料も後ほど紹介させていただきます。

次の年に、内閣府の一億総活躍推進本部会議から呼んでいただきました。貧困率の高いひとり親を捨ておいてはいけないと思っていたところで、こういった人たちを支援する形をつくるということで呼ばれ、お話しさせていただきました。このときも、とても緊張しました。きょうは、先ほど担当の方にお話ししたのですが、こちらに呼ばれたときより緊張しています。地元の先生方にお話しする機会ということや、地元ならではの、コンビニなどで買い食いしているところを見られるのではないかとといったいろいろなことを考えました。すごく緊張しているので、あちこち話が飛ぶかもしれませんが、御容赦ください。こういったところに呼んでもらってお話しさせていただき、日本弁護士連合会の弁護士による人権擁護大会という、年に1回の一番大きな大会でもお話しさせていただく機会をいただいています。

去年は熊本地震ということで、復興庁から呼んでいただき、熊本県でお話をさせていただきました。東日本大震災津波で岩手はこういった取り組みをしており、こういった視点が大事ですといったことをお話しさせていただく機会をいただきました。

こういった活動の中で、私たちの活動をお話しするときに、この問題は自己責任だ、取り上げるのではないのではという人たちもいらっしやるので、そのような人たちに理解していただけるような資料をつくっています。今からお話しすることは、先生方にとっていまさらこんな話と思うかもしれませんが、一通り私たちはこういった話を外向けにさせていただいており、紹介させていただきます。

ひとり親や子供の貧困対策をやらなければならない大前提として、その人たちの問題ではなく社会、地域がすっかり変わってしまっており、新しいことに取り組まなければならないということからお話ししなければならないと思い資料をつくりました。昔と今で大きく違うことは家族で、形や機能が違います。あとは、雇用システム、人口減少の3つです。今この3つに早急に手を打たなければ、若い人たちはどんどん苦しい思いをします。そして、高齢者の人たちはなぜ昔と違うのかという世代間ギャップもどんどん大きくなってしまいます。しかし、社会はどんどん変化し、誰もがまざり合わないうちに社会がどんどん縮小していく状況になってしまうのではないかと考えています。

家族と雇用システムが変容することで何がかわるかという、まず、人と人とのつながりが弱体化します。そして、新たに社会的孤立が課題になってきていることが最近の大きな特徴だと思います。社会的孤立は、ひとりであつて勝手に孤立しているのではなく、

社会のいろいろな仕組みが社会から追い出すさまのことです。追い出されたくて追い出されているわけではありません。

また、家族が担うと期待されてきた機能を社会保障というシステムが保障しなければ、人々は孤立し、排除され、分断され、縮小し、社会が解体することになります。昔は、社会保障は万が一のためにつくられていました。万が一について昔は想像されませんでした。家族、会社、地域の3つで守り合え、退職後の高齢からでよいということで社会保障がつくられていました。若者世代は、家族、仕事、地域があるからということで手薄でした。社会保障が人生後半のものでしたが、今は社会保障制度が全ての年代や、若い人たちに保障しなければ苦しみはとまらないようになっています。

高度経済成長期にできた社会保障制度は、2つの層を排除してつくられました。2つの層の1つが日雇い労働の層、1つの層がひとり親の層でした。この2つの層は少なく、自己責任で、システムに乗らない人が悪いのではないかという形であったと思います。昔は全員結婚するということが前提でしたが、今や4人に1人は独身で終わる時代で、何十年後には半数が単身者、独身者というデータも出ている社会であり、今と全く状況が違います。しかし、そのままの制度で来ており、ここで救われる人たちが少なくなっており大変なことになっています。

そして、貧困というイメージが人それぞれで、ばらばらです。戦後の焼け野原にシャツとパンツでいることや、ぼろぼろの格好をしている姿をイメージする人が多いのですが、経済的な貧困と一緒に社会的孤立の二つが合わさったのが今の貧困です。簡単な言葉で言うと、貧乏と孤立が今の貧困と言うとわかりやすいと思います。そうした中で、日本のひとり親は世界で一番貧困率が高いです。私たちがひとり親支援の団体をつくったときは、こういったデータはわかりませんでした。現場感覚として福祉や医療、法律などの現場で、ひとり親は大変だと見えてきたのが数値として出てきました。ここ何年かで出てきたことではなく、ずっと前から出てきていました。ひとり親家庭が抱える課題は、社会の課題の縮図になっており、この背景を今からお示しする資料で見たいと思います。

こども食堂を後からお話ししますが、こども食堂は貧困というイメージがあり、そういったところに行くとあの子は貧困だと言われ、活動は難しいという人がいますが、貧困という言葉ときちんと向き合い、乗り越えなければいけない時代になっています。そこを遠ざけ、ぼやかすと、ますますこういった人たちを排除してしまい、子供たちの未来を閉ざしてしまいます。少し語弊があるかもしれませんが、支えられる側から支える側にし、子供たちをきちんと納税者の側にして、一緒に地域をつくっていくことに力を入れなければいけない時代だと思います。貧困という定義を私たちはどこかに持ち、課題解決しながら前に進んでいき、対峙して乗り越えていくということをしなければならないと思っています。

子供の貧困の第一人者の阿部彩さんがわかりやすく定義して、貧困というのは、人とし

での尊厳が守られ、人権が守られ、社会参加の機会が保障されているかどうかと断言はできません。預貯金が幾らや、こういった生活をしているという基準はありません。尊厳と人権と社会参加の機会が保障されているかを断言はできません。

そして、貧困には絶対的貧困と相対的貧困の二つの種類があると言っています。絶対的貧困は、イメージしやすい発展途上国のようなところもあります。食べて寝て、翌日働けることが可能なぎりぎりの生活水準です。時代や地域や国を越えても共通で、世界的にもイメージしやすいものです。私たちの中で一番イメージしやすいものが絶対的貧困です。

今の貧困は、相対的貧困で、社会のほとんどの人が享受できる普通の生活ができない状態のことをいいます。その判断基準が、国や時代、社会によって変化します。昔はみんなそうだったということが今の時代には合いません。昔はスマホを持つと、お金があるとみなされますが、今は食べ物や服などを制限してもスマホを持っていないと人とのかわりがとれない社会になっているため持っているだけであり、裕福なわけではありません。

そういった貧困は、人とのつながりを奪い、人を社会的孤立に追い込み、居場所さえも失い社会参加も奪います。人間が生きていく上での精神的に大事な豊かさ、安心感や人とのつながり、自尊心や希望、安定した居場所を奪うことになっています。

生活保護の担当課の方と一緒に動くことがあります。10年くらい前に保護課のワーカーの方がどうして生活保護につながって保障されたのに自殺するのだろうと言っていました。生活保護につながった方で自殺する方は結構多いです。支援や制度、お金があっても、生きていくときにもう一つ何かが必要です。つながりや社会参加、お互いを認め支え合うというものです。これは目には見えません。だから難しく、知らないふりができますが、これからはしっかり見据え、知らないふりをできない仕組みをつくっていかねばなりません。

ここに東北、北海道の貧困率を出したデータを紹介させていただきます。都道府県ごとの子供だけの貧困率と県ごとの貧困率を出しています。スライドで見ると真ん中の濃い紫が岩手県で、真ん中くらいに位置しています。どの県も上がりっ放しです。下がっているのは、オレンジ色の秋田県になります。秋田県は子供たちの学力が高いと聞いたことがありますが、全体を見ると秋田県も岩手県も全部上がっており、下がる様子はありません。ここをとめなければならないというのが第一の課題だと思います。

そして世界的な国際比較を見るとわかりやすいのですが、下に行くほど貧困率が高く、経済大国と言われているこの国も大変ですというものです。この黄色く示したものが日本です。日本は下から数えたほうが早いほど貧困率が高いです。向かって左側が国全体の貧困率で、貧困率が高いのはイスラエル、メキシコ、トルコ、チリ、次にアメリカが来て、そして日本が来ています。経済大国が貧困率の高いベストテンの上位に入っています。隣の子供の貧困率も日本は下から数えたほうが早いです。その隣の三つは子供がいる世帯の貧困率です。この三つを見ると、一番右端は大人が2人以上とあります。両親そろっていても、日本は貧困率が高いです。ひとり親だけの問題ではなく、全ての子育て世代の問題

になっています。先ほどからお話しさせていただいている、ひとり親は右から2番目で最下位です。韓国は調査していないので、わかりませんが、日本は50%を超えており、2人に1人が貧困のラインを超えている状況が今も変わりません。

この表がすごくわかりやすく、ことしの春にこのデータを見たときに、厚生労働省が新しい資料をつくったと思いましたが、経済産業省の事務次官と若手のエリート官僚たちが作りました。「不安な個人、立ちすくむ国家～モデル無き時代をどう前向きに生き抜くか～」というタイトルを見てすごいと思いました。日本の経済の問題を見たとき、この問題を解決しなければ経済は回復しない、その一つが母子世帯の貧困ですということを明らかにしてわかりやすくしています。母子世帯の貧困、父子もあります。母子と父子の問題はジェンダー問題が出てきます。ジェンダー問題が女性の問題ではなく、周りめぐって男の人の首を絞めますということです。これは、男の人の生きにくさを示しているものでもあります。女性だけが苦しく、男性だけが幸せかという、そうではなく、そういった姿を見て育っている子供たちが、お母さんみたいになるのであれば結婚なんかしたくない、子供なんか持ちたくないと思うのは当たり前です。お父さんみたいに長時間労働で働き、いろいろなものを背負い、このようになるのであれば、結婚はいいかと思っている若い人たちの声はそのとおりかと思えます。

これは、母子を見るとジェンダー問題と一緒に男女賃金格差や、妊娠し、出産し復帰するときの条件がよくなく、非正規になり、低賃金で働かなければならないという状況が入っている資料です。大変な母子世帯を真ん中に置くといろいろな課題が見えてきます。最初にお話ししました社会の課題の縮図がここです。水色のバックにあるのは、日本型雇用システムですが、ここに正社員、非正規の問題があり、女性が一度出産などで労働市場から退くと、その後、大きな負荷がかかり、復帰できず、同じような処遇で生活給を得られないことがあります。

もう一つが黄緑色の箇所です。育児は女性が担うという価値観です。ジェンダー問題というアレルギーを起こす高齢者の方もいるようですが、若い世代の人たちはそのようなことはなく、自分の問題であり、男性の問題であることを若い人たちはわかっています。昔の家族の形や家長制度のままの認識でいるとわかりにくいです。いい悪いではなく、そのときの制度や仕組みがそうであったからですが、それくらい社会が変わっているということを認識していかなければなりません。ちょっと話がそれましたが、育児は女性が担うという価値観があることで、共働きでも女性だけの育児や、家庭の問題にかかわることが多く、仕事も途中でやめることも出てきてしまいます。

隣に、育児＝家庭責任論というくくりがあります。これを見ると、育児は家庭の問題で、内の問題であり地域や社会といった、外から口を出すことではないと任せられています。例えば教育費は家庭に任せきりです。家計により教育費は何にかけられて、勉強できるか、大学へ行くかが決まります。できないのであれば各家庭のせいとなっております。ここに地域コミュニティの崩壊とあります。地域は関係なくなり、子供たちがその次の地域を

担うのに、地域が崩壊してしまうということになります。

隣にシルバー民主主義とあります。高齢者は弱者という価値観に基づく社会保障制度が問題です。高齢者は退職した後は弱者で、あとは地域や社会に見守られながら隠居のような形ですが、これからは違います。今まで社会を担ってくださった大先輩方がもう一働きしなければならぬ社会が来てしまいました。人生 100 年です。80 年でも大変ですが、100 年ほどになっており、2007 年生まれの子供の平均寿命は 107 歳だそうです。そのように、どんどん寿命が延びていきます。そのようなとき、50 代、60 代でリタイアされたらとんでもなく、そういった人たちにこそ若い人たちを支えてほしいです。60 代、70 代の人たちが地域や子供や社会を支えるという仕組みをつくってほしいと思います。そうすることで、どんなに若い人たちが助かるか、どんなに若い人たちが、よかったと思うかということなのです。

そこで、世代間ギャップも少しずつ埋めていかなければならないのですが、仕組みというものが今ありません。私たちが生きてきた価値観と若い人たち、高齢者とすり合わせるなどの知る機会がありません。いくら言葉でこうですと言ったとしても無理ですので、その仕組みをつくっていき、さきほど言った貧困と向き合う仕組みをつくっていかなければなりません。私はその仕組みとして、こども食堂という誰もが同じテーブルで、誰もがここで一緒に食べることや、知ることができ、企業もそこに入り仕事を知るなど、そういった仕組みをつくるのが大事ではないかと思い、後半でお話しさせていただきます。

そうなりますと、高齢者の出番です。ゆっくり休んでくださいとも言いたいのですが、社会の流れ、寿命、今の少子高齢化の問題を考えると、そうではなく、もう一働きしていただいて、一緒に若い人たちを支えてほしいと思います。

次の資料が先ほどお話しした官邸に出させていただいた資料です。消費税というと、家計の問題になります。家計を見るときに、総務省が家計調査を毎年出しており、その家計調査の資料ですが、母子世帯の家計も毎年出しています。これを見るとお金のある母子世帯もいますが、全国平均を出してみると、下から 2 番目、マイナス 1 万 2,083 円と赤字があります。家計に赤字はあってはいけません。この横を見ると黒字額とあります。つまり、毎月約マイナス 1 万 2,000 円が母子世帯で赤字ということを行っています。これが毎月重なっていき、手当てしないまま消費税などが上がってしまうと、いろいろなゆがみが出てきてしまいます。そのため、財源確保は大事ですが、ここの手当てもしてくださいというお話をしてきました。

下から 2 番目の項目に書きましたが、家計の中で何かを削るといったときに、費目の中で削られる項目というのは三つしかありません。食費と教育費、医療費しか削ることはできません。私はもともと消費生活の専門の分野にいましたが、この三つは子供の成長に一番影響するものです。食べることと教育することと医療のことの三つに対しての手当てが大至急必要になってきます。そして、医療は、去年歯科医師会にお話しさせていただく機会をいただいて、口腔崩壊といって歯医者に行く機会がなく、虫歯の多い子供たちが貧

困世帯に多くなっています。私も借金問題や自殺対策のときに、お金と虫歯は自然治癒しないということを相談者の方には言ってきました。寝ていて治るものではありません。こればかりは専門家の方などによる、ちゃんとした手当てがないとどんどん悪化します。食費、教育費、医療費はすごく大事です。

この前、福島県の大学にいた先生のお話を聞き、福島県の子供世帯は中学校までは医療費無料で、歯医者に行けるのですが、それでも行きません。ということは、お金だけの問題ではないのではないかという話になり、それは何かというと、連れていける人や時間がなく、ひとり親や共働き、低収入で働きずくめの親御さんは時間などが確保できません。貧困問題と経済問題は、時間の問題です。ましてや、ひとり親はひとりで全てをしなければならず、くたくたで、時間の貧困とも呼んでいます。こういったことを理解できない人たちに対しては、発想力の貧困者や、想像力の貧困者という話をさせていただき、そういった現実があるということをお話しさせていただきます。手当てしなければならないことは食費や教育費や医療費や時間であり、例えばワンストップでそういった人たちがつくった時間を大事にし、解決するような仕組みや、自分のお母さんやお父さんの時間がないところを、誰か地域の人が支える仕組みや、医療、教育費、食費も、そういった地域やいろいろな人たちが何か手当てできる仕組みができることが、遠回りですが早道の急がば回れの仕組みなのではないかという話をさせてもらっています。

こちらは、盛岡市が平成 29 年 2 月に調査した資料です。全国で市町村や県がひとり親などの貧困の調査を始めました。調査しないと見えてこず、これに対してどうとは言えませんが、物すごく勇気が要ることだと思います。調査したら逃げられませんが、逃げている余裕はこの社会にありません。もう見ていくしかなく、これに対してすぐ手を打つしかないと思います。これを見ると、母親の現状は、土日、夜間も働いているので、子供と過ごす時間が制約されています。賃金が低いことや、収入を得ようと思えば、ダブルワーク、トリプルワークをすることになります。子供のために働いていますが、子供という時間が奪われることになっています。就労率は国全体では 80% ですが、岩手県のお母さんたちは物すごく働いていて 91.6% になります。お父さんもそうです。諸外国と比べても、アメリカなどはもっと低いです。日本の、特に岩手県のひとり親のお母さんは日本一働いて、世界一働いているのに大変な状況ということなのです。

体のことや、お金のことということはなかなか知られたくもないので、お金や家計管理に関する悩みについての相談を誰にもできないと思います。私は、被災者の支援を一生懸命しており、住宅供与がもう少しで終わり、その後、家賃を払って生活していけるかということをやっているいわて内陸避難者支援センターを、岩手県から任せていただいて被災者の方と話すのですが、お金のことを言うことは大事で、物すごく神経が必要です。ここをやらないと次に行けず、さきほど言った社会保障システムに当てはまらず、あとは路上しかなくなるということになり、大変なことになってしまいますのでここを支援できる人がすごく重要です。

そして、子供です。子供は、放課後ひとりで過ごす割合が3割を超えています。そして、経済的な理由で塾、習い事をしていない子供たちが6割を超えています。子供たちに何したいと聞くと、習い事をしたい、何々ちゃんは英語に行っている、何々君はスイミング行っている。夏のプールもみんな楽しそう、成績もいいんだと言います。こういったところは半数以上の人たちが実感しています。家庭全体で見ると、過去1年間に家族が必要とする食料を買えなかった世帯が47%で半数近いです。そこに自由記述欄があったそうです。それを調査した先生に聞いたところ、調査票が燃えるようだったと言っていました。そのつらさや苦しみ、悲しみなどで真っ赤に燃えるような自由記述欄があったとありました。生活の苦しさや子供の将来への不安、さまざまな生きにくさがそこで明らかになり、課題解決のための包括的な支援が喫緊に求められていることがわかったと締めくくられている報告書です。

こうやって見ていくと、深刻な日本の子供の貧困は、どこの地域でも政策の第一課題になってくると思います。ひとり親はこのとおりですし、2人でも大変です。2人だとますます子供という時間が少なくなります。子供の支援やその世帯、子育ての世帯の支援は重要です。子供の貧困は、学力、健康、自己肯定感などと相関関係にあります。収入と同じくらい関係があるという話も出てきています。ここに手をつけないと若い人たちがどう思うかという、例えば震災や事故、DVや犯罪などから逃げることや、いろんなことがあってひとり親になろうと思って前に進もうと思ったとき、苦しい状況が待っており、ひとりになって子供を抱えることが苦しく、リスクがあるのであれば要らないと考えることが当たり前のことです。それでも地域の人がこういったシステムがあるから前向きになろう、また誰かとめぐり会うかもしれない、いろいろな生き方があるかもしれないという可能性がある仕組みがある社会とどっちがいいかといったら、若い人たちはそういった仕組みがあれば一歩踏み出せるのではないかと思います。

特定非営利活動法人インクルいわては、そういった話を聞いてきて、たった6年です。東日本震災後にできた団体ですが、約九つの施策を打ち、活動してきました。この中で、実現していないのは、一番上の包括的な中間就労支援であり、一億総活躍の会合にはこのことと呼んでいただきました。お母さんが働こうと思ったときに、今のような課題、時間やスキルのなさで、仕事を得ようと思ってもなかなか得られず、いざ得たとしても続けることができないという課題が起きてしまいます。仕事というのは手に入れるだけではだめであって、続けることが大事です。続けるために何が必要かという、課題を解決することです。例えばハローワークなどに行き、仕事を得ても、その後にやめてもわからず、また行けば2カウント、3カウントになり、ハローワークは利用されていますではなく、その人がつかんだ仕事をずっと安定してできていけるかどうか子供とお母さんにとって大事です。そのために、抱えている課題を解決しないと繰り返すだけです。お金や心、体といった子供たちに負荷がかかることの仕組みを解決することがお母さんと子供の中間就労になるということをお話しさせていただいて、それを岩手県の6人のお母さんたちが実証

してくれました。この後に紹介しますが、内閣府に行ったときに、これは、インクルさんがある岩手県ならできるが、ほかの地域はできないかもしれない。横並びとは難しいと言われたのですが、私たちは就労のプロではなく、お母さんたちがこうしたい、子供たちがこうしたいということを積み上げたところ成果が出ました。ですから、どこでもでき、もしもっと社会が悪くなっていったとしたら、出番は確実にやってくるのではないかと思います。

そして、ワンストップセンターが必要ということを経済院会館などいろいろなところから呼ばれお話しさせてもらいました。去年、山形県の議員が来てくださり、山形県ではつくられ、いい成果が出てきているようです。いろいろな制度や仕組み、支援ができるワンストップセンターは本当に必要であり、岩手県にも必要だと思います。

困窮者支援と連携が必要といったところ、厚生労働省が通達を出してくれました。社会・援護局は児童家庭局と縦割りですが、そこにつながりができるようになりました。例えば敷金、礼金なしで空き家の活用を困窮者世帯に対応してほしいといったことで、去年、国土交通省が夏くらいに困窮者支援でも使うということを言ってくれ、動いているようです。それが地域に落ちてくるまで時間もかかり、中身も制約ができてしましますが、岩手県で使えればいいと思っています。

児童扶養手当は4カ月に1回のまとめ支給です。さきほど言った毎月が赤字だと、頼らざるを得なく、多重債務者をつくることはまとめてお金を渡すことです。せめて毎月にしてほしいということを行ったところ、手間暇がかかりますが、先月、厚生労働省でせめて2カ月に1回、年金と同じようにするという話が出たようで、そういったようになればいいと思います。

あとは、制服です。あるお母さんが入学式に子供を出さなかったもので、どうしたのと言ったところ、制服を全部そろえられなかったためという声がありました。急いで、いろいろな方々に声をかけ、市役所の担当課の方に言ったところ、庁内メールを職員に出して下さり、職員のお子さんの中学校の制服が集まりました。お金などを使わず、そういった対応ができるということを学びましたし、わざわざ下さい、あげますではなく、こども食堂の横にぼんと置いておいて、何げなく目に入るようにして、利用してもらおうということがいい成果を生んでいます。

そして、それぞれの居場所づくりです。気持ちを吐き出せる場所は今までありませんでしたし、そういったことを理解する地域の人をふやし、仲間をふやすということで、孤立防止と地域の理解促進で養成講座やこども食堂を行っていることがインクルいわての6年間の活動です。

先ほどお話しさせていただいた中間就労、包括的な就労支援をいろいろなところできたらいいと思っています。お母さんが働こうとか、お父さんがもっと働こうとしたとき、不登校や病気を持っているなどの子供の問題や、お母さんが心や健康の問題を抱えているときに、生活の支援を行い、事務のスキルを身に付けながら、一緒に半年間スキルを積む

ということを行いました。

このとき、まず、地域の人たちの意識改革を行いました。6年前に、ひとり親支援といっても考え方がありませんでした。ひとり親と自分たちだけが頑張っても、地域に行くと排除されたら意味がなく、仲間と意識改革しなければなりません。シンポジウムや養成講座を開き、いろいろな人たちにひとり親の問題を一緒に考えましょうと言って仲間をふやすことが大事と考え、2012年の7月にシンポジウムを開きました。ここに行政の担当課の方や地域の人に来ていただき、岩手県初登場の阿部彩さんにお話をしていただき、被災地だからこそういった人たちを包摂して、全ての人が参加して力を合わせる包摂のモデルの県をつくってほしいということをお話しされていました。

養成講座にたくさんの方が参加してくれましたし、毎年こういった養成講座を開き、全国のいろいろな部門の人たちからお話を聞く機会を少しずつ増やしています。岩手県がすばらしく、県の事業として養成講座を行い、盛岡だけではなく、沿岸、県北、県南でもそういった人を広げていったほうが良いということで予算をつけてくださり、私たちが提案させてもらい、広げることができました。アンケートにも待っていましたと書かれており、こういった活動をしないと地域が消滅するなど、いろいろなアンケートの答えがあり、仲間がふえてきたと思っています。

それらを行った上で、就労支援を行ってきました。生活困窮者でも中間就労という形で、仕事の前の課題を解決し、就労準備をひとり親で行いました。これは、オックスファム・ジャパンというイギリスの貧困対策の国際の事業がお金を出してくださいました。オックスファム・ジャパンは毎年世界の8人の富が世界の資産の80%の富と同じだということを毎年発表している日本版の会社です。被災地でこういった活動を行う団体が大事だと言ってくれ、半年間のお母さんたちの就労支援のお金をいただいていた。

7人のお母さんに来てもらい、半年間課題解決や、一緒に就労支援を行い、半年後どうなるかということを行いました。そのときの研修生など支援のスタッフは、養成講座で育てた地域の人たちに6カ月雇用という形で入ってもらい行いました。研修してもらいますが、雇用です。少しでもお金がないと大変で、お支払いすると大きな成果がありました。

研修の中に、家計簿研修を入れました。家計の問題は大事で、少ないからどうでもいいわけではありません。本当にお金が少なく、お金の使い方をわからないお母さんが1,000円持つと、同じ缶詰を10個買ってくるということを行います。そのうちの一つをヨーグルトにしてみよう、バナナにしてみよう、といったことから始まりです。最初から御飯をつくり、みそ汁をつくりではなく、そういったことで少しずつゆっくり、力が失われているお母さんたちをどういったかたちに変えるかということで行いました。24時間そのお母さんから何かSOSがあったら対応できるスタッフをつけました。写真は、こういった形で簿記の練習やパソコンの練習を行いながら、6人ともパソコンのボタンを押すところから始まるお母さんたちです。あるお母さんは、東日本大震災津波で自分とおなかの子と1歳と2歳の子供以外の、夫や両親といった全ての人を失いました。あとは震災後に夫が自死

した方、精神病を患っていて、なかなか就労にたどり着かない方、施設に入り逃げて、また施設に入っている方など本当に大変な人たちが6カ月でどれくらい変われるだろうというところで行いました。最初は大変でしたが、6カ月後にはここに書いてある、くらしのハンドブックをお母さんたちが卒業記念でつくりました。ボタンを押すところから始まったお母さんが6カ月で変わりました。

このお母さんたちに、子供たちは最初、10分置きにお母さん、どこにいるのといった電話をかけてよこしましたが、ちゃんと出てもらいました。普通の研修では出られません、こういった訓練のときは出てもらわなければなりません。なぜなら子供たちはお父さんがいなくなり、おじいちゃん、おばあちゃんもいなくなりました。お母さんが帰ってこないのではないかと思うことは当たり前ですが、それをお母さんに言わず、ただただ帰ってくるまで不安でいるより、お母さんがちゃんと電話に出てもうすぐ帰ると言うため、とことん出てくださいと言ったところ、1カ月後には電話がかからなくなりました。子供たちも安心し、お母さんが帰ってくることを知った積み重ねです。きっと大人や青年期でも、その不安をきちんと解消し大人になるかどうかです。ここで得た就労のお金でたい焼きや子供のスカートを買って帰ったりすると、お母さんの仕事のお金でこういうものを買えたんだね、食べられたんだねと言い、どちらも笑顔になります。こういったことに技術も何も要りません。小さい積み重ねで最後の6カ月後まで7人のうち5人が在籍しました。1人は、実家のお母様が病気になり、早めました。そして、1年後に全ての方が就労されました。1名だけが精神病が少しありましたが、社会参加することができました。外に出てボランティアや、SOSを出すなど、こもっている方が変わることができました。

その研修生のBさんの感想を読んでもらいます。すごくいろいろなことを知れて、自信につながりました。人に会うこと、外に出ることが恐怖になっていましたが、改善され学校のPTAなどにも出られるようになり、この変化に自分でもびっくりしています。PTAに出るといのは当たり前のことです。ですが、いろいろな力を奪われていると、これさえも困難で、人と会うことや外に出ることが困難な人たちがおります。震災のPTSDや、いろいろな犯罪から逃げたなど、どんなに頑張っても心と体が病んでしまう人たちにとって、この変化というのはすごく大きいと思います。

そして、費用対効果で見ると、こういった人たちを放置しておくと、心も体も病み、生活保護になります。生活保護の基準を見ると、こういった人たちは月額18万円で、年額だと大体216万円、厚生労働省の資料によると大体7年から8年間受給することになり、1世帯当たり1,600万円の税金がかかります。その人たちをバッシングし、あの人たちは何もできない人たちだと、何を抱えているかわからないまま排除したままにしておくのか。それともそこをきちんと見て、さっき言ったいろんな社会の課題がここに集中して、ひとりではどうにもならない状況で頑張った方々をケアし、社会に支えられる側から支える側にするよう支援するのかわかりませんが、全く色が変わり、将来が変わってきます。こういった支援を行うことは、現状のコストの削減にもなりますが、未来のコストの削減にもなり、生産人口

や納税者の育成にもつながる大事な仕組みと思っています。

そして、子供の貧困で包括的な支援が必要とお話しさせていただきましたが、子供の貧困もようやく平成26年に法律ができました。子供の貧困というのは、さきほど言ったように昔からありましたが、やっと法律ができ動き始めました。古くて新しく、そして今からみんなで作るのがこれからの子供の貧困対策です。全ての人が今スタートラインに立っています。もう遅かった、今までやらなかったことなどを責めるのではなく、今からみんなで作っていきましょうということがこれからの子供の貧困対策で、新しいスタートだと思います。

これを実現するため大綱がつくられており、2019年に大きく見直され、新しい項目が入るといふ報道があり、ここに挙げてある、朝食欠食児童、生徒の割合や、相談相手が欲しいひとり親の割合、必要な頼れる相手がいない人の割合、ひとり親家族の正規職員、従業員の割合、ひとり親家庭で養育費の取り決めをしているかどうかの割合、こういった項目が入ります。さきほど言った調査で出てきたお母さんや子供たちの声、現場やいろいろな人たちが取り組んできた声が入ります。こういったことが今進んでおり、大至急、岩手県でも行いたいと思っています。下から2番目の養育費の取り決めについては2割しかいません。子供はひとりではできず、どちらにも責任はあるはずですが、引き取ってもらった側には、8割の人は結局責任を放棄しておりますし、知らぬふりをしています。そういった人だから別れるといったことや、いろいろなことがあったと思いますが、逃げ損にはしてほしくなく、女性だから子供を引き取るのが当たり前という、さっきの女性が育児をではなく、男性もきちんと育児もできますし、イクメン、イクボスといろいろ言っていますが、男性も女性も一緒に育ててこそ子育てです。いろいろな制度をこれから整備していくという、今からがスタートだと思っています。

日本はこれからですが、外国では昔からこういった取り組みがあり、いろいろなエビデンスがあります。これは日本財団の資料で、外国で子供の貧困対策に必要なのは二つだと言われています。一つは、適正な社会的相続と非認知能力で、この二つを高めることが貧困対策に有益と言っています。社会的相続とは、自立する力の伝達行為と言っています。ちょっと難しいですが、例えば価値観や職業観、生活習慣が親や、おじいちゃん、おばあちゃんから受け継ぎますが、適正なものを受け継いでいないと、貧困に陥りやすいです。

職業観も価値観もそうです。ある子供に大きくなったらどんな仕事をしたいかと言ったら、役所に行けばお金もらえると仰いました。その子には、悪気はなく、そういった親の生活や病気などいろいろあるのと思いますが、職業観が育まれず、伝達されていないと、それがその子の全てになります。もし親ができなければ、例えば地域の人や会社、様々な人たちがその子にいろいろなことを提供できればいい話だと思います。金銭感覚や生活習慣も同じです。そういった伝達行為から自立する力を子供に提供することです。

あとは、非認知能力とは、学力以外の力を言うそうです。例えば自制心や意欲などやり抜く力、そういったものを高めるにはどうしたらいいかというと、一番下に基本的信頼が

ないと、非認知能力は高まらないそうです。例えば極端な話、学力は基本的信頼があるないにかかわらず、勉強すれば高まり、誰も奪いません。しかし、非認知能力を高めるには、基本的な信頼がないと育まれないそうです。周りを信用できなければ目標を持つことや、コミュニケーションをうまくとること、やり抜く力、社会性が育たないことからここを何とかつくっていかなければならないと言っています。

その次に、アメリカでは、ペリー就学前計画があり、50年間、後追い調査も行い、貧困対策に対して有用なものは二つと言っています。子供の支援ですので当たり前ですが子供向けプログラムと一緒に親向けプログラムで親と子を一緒にやらないと子供の貧困対策になりません。子供の貧困は子供が貧しいわけではありません。子供の支援ではなく、親の支援が重要だからこそ母子支援やひとり親支援、親子の支援をできるスキルと仕組みが必要です。例えば何年かたち子供が問題を起こすと、あの親だからしょうがない、あのうちだからといって親をバッシングする時代はもう終わりです。仕方がないのではなく、だったらどうすると一歩踏み込む時代に入ってきています。

親をバッシングし、お母さんの隣で子供が泣いていたとしたならば、そのお母さんは20年前その子と同じ顔をして、同じ年で泣いていたということです。貧困は連鎖をしています。20年前にそのお母さんが子供のときに手を差し伸べられなかった、大変なときに手を差し伸べられなかった、その支援がなかったことが貧困の連鎖を生んでおり、同じことを繰り返しています。そのお母さんも昔は子供だったということです。その連鎖をとめることが一番大事で、親をバッシングしても何の意味もなく、ここに踏み込まなければなりません。

次に未来のことを言っていきます。これは文部科学省が出している資料です。子供たちの未来というもので平成27年に出したのですが、明るい話ではなく、これを乗り越えなければならないと思っています。10年すると、2030年で、少子高齢化がさらに進行する一方、グローバル化や情報化が進展する社会で、いまだかつてないスピードで相互に影響し合い、例えば貧困などの出来事や、いろいろな犯罪が広範囲、複雑に絡み合い、先を見通すことがますます難しくなっていきます。先ほどの経済産業省の不安な個人、立ちすくむ国家のように誰もが見たことのない社会に突入していきます。前例はもうありません。世界的にこういったことに進んでいる国はなく、前例主義は全く通用しなくなり、新しいものをつくり出していかなければならない社会になっています。

震災の年に小学校1年生だった子供たちが大学に入ったときに、65%が今ない仕事につくそうです。イメージができますか。私たちが小さいとき、携帯会社やパソコン会社ってなかったのと、そのレベルで済むのかどうかです。その情報にたどり着いた子は仕事を得られますが、そういった情報やスキルにたどり着けない子はどうなるかと思います。そして、3年前の2014年のとき、今後10年、20年近くで半数近くの仕事が自動化され、例えば弁護士、税理士の仕事もなくなるのではないかとされています。そして、2045年には人工知能が人類を超えるシンギュラリティに到達すると言われています。AIがすごい勢

いで進展しています。この前にいろいろなことが起きてしまうかもしれません。

次が地域に関係あることで、これからの日本の形です。あと7、8年で、この国は単身世帯が一番多くなります。2人でも4人でも3世代世帯でもありません。日本の3世代世帯の割合は12%ですが、岩手県は20%あります。これもいつどうなるかわからず、そうしたくてしているのか、必要に迫られてしているのか経済状況をきちんと調査してみないとわかりません。そのさらに5年後は、日本の全世帯の3分の1が単身者世帯になります。3人に1人がひとり暮らしになるそうです。そして、寿命が延びるわけです。その年にはひとり親世帯が10世帯に1世帯必ず出現します。さらにそのたった5年後には、子供のいる世帯の3分の1がひとり親世帯になります。3人に1人、子供のいる世帯がひとり親になるということは、このまま放置していくと3人に1人は困った状況を抱えている状況になりますし、その年には人口の約半分が独身者になります。独身がいい悪いではありません。結婚をするもしないも、産むも産まないもその人たちの自由ですし、多様化です。これは昔と違っており、みんな結婚する時代や、しなければならぬ時代とは違っていていますし、そこを言ったら若い人たちはもっと苦しみます。

ただ、結婚したい、子供を持ちたいと思ったときに、それができない状況ということがどんなにつらいことか、そこができる仕組みがあったら、では2人目を産もうと、結婚して一緒にやっっていこうと思えると思います。そういう仕組みをつくっていくということが大事で、今はリスク社会でみんなリスクをとろうとしません。自分さえ何とかなればいいと思う世界で、ここを何とかする仕組みをつくっていく必要があります。孤立生活がこれから標準化し、長期化すると、ますます困難な姿は見えにくくなっていき、弱いところに集中してきます。隣で誰が亡くなっているか、何があるかもわからない。こういった社会がすぐ目の前に来ています。現行の制度や仕組みだけでは難しく、そのすき間を埋める地域のネットワークが命綱になっていきます。そして、昔に戻ろうとしても、戻れないぐらいの状況になっているということです。

こういった状況を中央大学の山田先生が家族難民と言っています。家族難民化するのに二つの現象が起きており、一つは献体登録者の数がふえています。1970年代には献体する方が年間1万人いましたが、2014年には24万人にふえています。中高年男性独身者がフィリピンやタイのチェンマイに退職金などのお金を持っていくと、海外のほうがもっと豊かに暮らせるのではないかとということで渡航し、海外に移住しています。向こうに行く人が多いのですが、円安の進行で生活が困難になることや、本当の難民化するのではないかとということが言われており、2カ月ぐらい前の新聞で、日本の男性が問題になっているニュースが流れてきました。2040年には年間の孤独死が20万人になるそうです。2014年には年間3万人で、自殺者は3万人をようやく切りましたが、それと同じくらい孤立死、孤独死もふえています。2040年には20万人、そこから10年すると50万人になるそうです。つまり行政に孤独死対策窓口ができるだろうとも言っています。標準的な家族をつくらなければ、社会保障も使えず、居場所が確保しづらかった社会を変えていかなければならぬ

くなっています。こういったものを見ると、ひとり親家庭の課題をやると日本の社会の背景、今までの課題などの変容が見えてきます。

そして、ひとり親家庭の課題解決と子育て支援は、未来の万能薬です。ここをやるのが万能薬であり、特効薬です。そして、これを自分たちだけではなく、高齢者の方や全ての人が一緒に行き地域をつくっていくことが特効薬、万能薬です。人口減少の流れを変えて次世代の減少を食い止めるのが子育て支援です。政策の真ん中は経済かもしれませんが、子育て支援がこれから真ん中に来ます。そして、社会的孤立リスクを抱えている人が自立し、生きる力を強める仕組みをつくることに経済界の理解と協力は本当に不可欠です。地域住民の参加を得ながらつながる場をつくっていく。そして寄り添うのではなくても、できるだけ多くの人々が我が事と考え積極的にその支援の輪に入るかどうかです。思いを寄せるだけではなく、一緒にその輪に入るという仕組みをつくるのが一歩進んだ仕組みづくりで、子育て支援は究極の地域づくり、その仕組みの一つがこども食堂だと思われ私たちは活動しています。

ようやくこども食堂の話になったので、あと10分いただきます。こども食堂は何も食べられず、困っている子供たちに来て食べてもらうところではなく、大きな意味がありますし、意味を持たせたいと思っています。これは、何も定義もありませんし、制度もありませんので、その人たちやその地域でつくれるものであり、物すごく宝箱だと思っています。誰も孤立しない地域づくりとこども食堂は復興に不可欠です。なぜなら地域づくりだからこそ、岩手なら実現でき、いいものができるはずです。

こども食堂は子供だけのものではありません。こども食堂は食べるメニューだけではなく、食事や制服、支援、見守り、高齢者とのかかわりなど、いろいろなメニューが実施可能な、子供を真ん中にした地域の居場所です。例えば高齢者施設に子供たちと行こうするとハードルが高いですが、子供たちのところにみんなで行こうと言ったほうがハードルは低いですし、行く言いわけもつきやすいと思います。それを裏メニューとしなければいけないと、表メニューにするとあそこに行くのは大変な子供たちだというレッテル張りになるので、こども食堂というのは子供がひとりでも来られる安心できる場所ですとみんなが言っています。裏メニューにきちんと子供の貧困対策を置かないと、情報を得られた強い人たちだけが車で押し寄せ、ただで食べられる、おいしいものがあると、食べて帰るといのが全国的に起こっており、そっと電信柱の陰で見ているような子供たちの分がないことや、そういった子が入りにくいという状況が起きているそうです。やり方が大変ですが子供の貧困対策を裏メニューとしてちゃんと置き、見えないけれども何かあったときに、あるよと言える。昔、HEROという木村拓哉さんが検事の役のテレビで、夜におしゃれなバーに行って芋の煮っころがしがあるかと言うとあるよと言うし、これあるかと言えばあるよと言い、みんなびっくりするようなシーンがあって、ここに行って何かあるかといえば、あるよと言えるような、そういった場があればいいと思います。

子供の貧困対策の裏メニューのさらにその裏メニューは社会的な孤立対策です。地域の

全ての人々が孤立しない、一人一人の高齢者の人もいろいろな人も障害者の人も、いろいろな人たちがここで支え合い、あそこに行けば誰かに会えるといったことが緩やかにできる場所で、地域住民のお金のある人もない人も誰もが文字どおり同じテーブルに着くことができ、理解し合うことができます。もしかしたら最初はハレーションが起きるかもしれませんが、でもそれは当たり前のことで、そこを乗り越えなければ次に行けない社会になっており、乗り越えなければならないことが山積みです。それは、今までの社会の積み重ねを放置してきたからしょうがないと思います。これをやっていかないと子供の未来もなく、地域や人口増や少子化問題につながりません。全ての人々の生きにくさを解消する居場所としてふえていけばいいと思います。

あとは、国の委員の村山先生が食べ物のデータを下さったので、つけ加えました。お金のあるなし、ゆとりがあるなしで食べる内容が違います。それもイメージしやすいのですが、野菜や魚等の摂取量などの頻度が違いますという資料をここに載せました。

こども食堂は、全国でどんどん広がっており、ここ二、三年で500カ所ぐらいできました。最初に東京からぼつぼつ出て、東京や関西で大きくできてきたものが全国的に広がりを見せました。私たちが開催するときに東京や大阪を何件か視察してきました。みんな二つの同じ課題を抱えていました。一つは、ボランティア同士のいざこざがあることと、あとは来てほしい子が来てくれないということです。やりましょう、遊びましょうであったら、余り課題がなく情報が手に入る子たちが来やすいのですが、本当に来てほしいのは、誰かとかかわることや、あのねと言ってほしい子供たちで、そこにアウトリーチする仕組みがないとただの遊び場になってしまいます。けれども、表向きは誰でも来られるとしないと、ますます来にくく、本当に難しいからこそスキルと仕組みが必要です。

岩手県でこういった取り組みをしようということで私たちもやっており、メンバーが紫波町や一関市、陸前高田市の方など、地域の人たち、いろいろな団体がどういうふうによればいいのか、保険をどうすればいいか、衛生をどうするかといったことを、プライベートで月に1回集まる準備会を立ち上げました。こういったネットワークがもっとつくれたらいいということで、みんな仕事をしながらで大変ですが、緩やかに少しずつ進んでいます。

インクルいわてのこども食堂は、お手元に資料をお渡しさせていただきましたので、ぜひパンフレットのほうを見ていただきたいと思います。メニューは、地域の方から寄せられる心と食材でつくられています。地域の人たちと子供たちが一緒に調理しています。子供たちの食べたいこと、したいことのリクエストが実現されているメニューで、裏メニューは、企業さんとの交流のしゃいん食堂、学生さんも巻き込んだがくせい食堂、制服リサイクル、学習支援、親子の相談室です。メンバーには弁護士や支援員がおり、ボランティアの中にそういった専門家を忍ばせ、相談をして、やりたいこと、したいことのリクエストを実現するようにしています。

特記したいことは、しゃいん食堂プロジェクトです。こども食堂の財源をよく聞かれるのですが、企業や地域の方々の寄附です。企業はお金をくれる人たちではなく、一緒に地

域で働いている人たちです。子ども達が地域にこんな企業や商店があるということを知ること、働いている人たちの姿を見せることが大事で、寄附だけではなく、一緒にここに来て仕事を体験することや、一緒にお話ししてくださいということをお願いしています。そういったことにより、子供たちに職業体験で働く人との触れ合いの機会をつくり、将来の選択肢を広げ、生き方や働き方、職業観、地域の岩手にはこういった会社があり、僕はこういうところで働きたいといったように、いろいろな選択肢があったとき、みんなが遠くの大学に行けるわけでもなく、行こうと思っているかわかりません。そういったなかで地域の会社や仕事を大事にすることを知ってもらうことはすごく大事だと思います。

また、いろいろな特徴があり、ある日食堂のところに食べたいもの、やりたいことを書いてと附箋用紙を準備しておく、いろいろな声が集まってきます。食べたいものの第1位はお肉です。とにかく肉、肉、肉といつも書かれてきます。そして、カレーや果物などがあり、フルコースが食べたいとは誰も書きません。ただ、デザートや果物は高級品と思っており、思い切りスイカが食べたいといったことは書かれてきます。やってみたいことはバーベキューやキャンプなど親子2人やお母さんではできないことがあります。ある男の子と女の子が、実はキャッチボールがしたい、でもお母さんはできないし、足が悪い、あとけがしたら病院に行かなければならない、病院に行く時間もお金もないからスポーツはしないようにしているという声もあり、企業がそのとき寄附を申し出てくださったので、野球の道具をお願いし、野球の道具をもらったところ、次の会に子供たちがわあっと集まり、そこに来たボランティアのおじさんとか学生さんと一緒にキャッチボールを始めて、本当に幸せそうに楽しそうにキャッチボールしていました。小さいことかもしれませんが、そういったことの積み重ねがいろいろな子供たちの心の栄養になっていきます。

この写真がこども食堂で上がった声から実現したものです。ここにやってみたいこと、してみたいことを書いてもらい、実現した中にスイカ割りもありました。親子2人でスイカ割りは難しく、スイカも高いですが、みんなでやると楽しかったですし、バーベキューもこのように行いました。子供たちの大好きなお肉は、そのころ記事を見たお肉の卸業者さんがこれを寄附してくれ、毎回いただきました。子供たちがわあっとなり、このお肉と一緒に手紙が入っており、自分も貧しい家で、お母さんが一生懸命育ててくれて、今は身を立って会社をつくりました。今度は、これを子供たちに食べてほしい、市場に出回らないくらい立派なものですと書いていました。お正月やクリスマスはすき焼きなど私たちが食べられるようなものでないのがどんと来て、子供たちが本当にうれしそうに食べており、毎回お肉のおじちゃん、まだかなとか、今度どんなお肉かなと子供たちが楽しみにしていました。でも、あるときからびたっとお肉がとまりました。子供たちも心配していたところ、そのおじさんは岩泉町の方で、豪雨災害で被害に遭われ、今は支援できないということをお伝えたら、子供たちがすごく心配して、お肉のおじちゃん大丈夫かな、元気かな、けがしていないかな、僕たちに何かできないかなと言い出して、みんなで色紙3枚になるくらい、いろいろなコメントを書いて送りました。そうしたら、おじさんから返事が来て、

みんな、ありがとう。僕がみんなを支えているつもりだったけれど、今みんなに支えられている。支える、支えられる、こういうことなのだね、教えてくれてありがとうとありました。子供たちにそう言うと、子供たちがすごくうれしい顔をしました。本当に子供たちは未来、みんなを支える人たちです。子供たちは未来の私たちを支えてくれる、地域を支えてくれる子供たちに、こういう体験やこういう話を継ぐことが大事だと思いました。

寄せられる本も、ただのマンガではなく、寄附下さる方はドラえもんや天体の本や、まるこちゃんのことわざの本など勉強シリーズを下さいます。中には匿名で一関工業高等専門学校で赤本を送ってくださった方がいました。自分も本当に貧しい中で一生懸命勉強した。ここは寮費も出て、大学にも進学できる。就職もいいよ。だから、もし勉強する機会を得てこういった学校に入って身を立てて社会に貢献する子供になってくださいということでした。そういった思いがたくさんここに寄せられ、出会いが子供たちにとって大事です。おうちでいて、お母さんが帰ってくるのを夜ひとり待っている時間より、こういうところでいろいろなかわりを持つことがどんなに子供たちにとっていいか、こういったエピソードが物語っていると思います。

ちょっと駆け足でしゃべりますが、子供たちに聞くと、イベントが寂しいと言います。盛岡市の調査にもありました、クリスマス、お正月、誕生日をちゃんとやってあげられないとありました。お正月、運動会もお母さんと2人ですが、ほかはおじいちゃんやおばあちゃん、兄弟もいて、わいわいやっているが、中にはお母さんも仕事を休むと会社の人に嫌な顔をされ、収入も減るから、ごめんね、運動会行けないんだと泣きながらお弁当を渡され、先生と食べてと言われた子供もいました。それであれば、そういったイベントをみんなでやろうということで、お餅つきやお正月などにいろいろなことをみんなでやるようにしました。食堂も子供たちがお客さんではないのです。本当に生きる力、将来の担い手なので、一緒に食事をつくります。お客さんじゃない、私たちの食堂だよと楽しいことを言ってくれます。バイキング料理を食べたことがないという子供たちもいました。それではということで、その日寄せられた食材でいろいろなメニューをつくりました。大根が多い日や芋が多い日などがありますが、地域の近所のおじいちゃん、おばあちゃんが大根一つでもいろいろなレパートリーがあるので、見た食材、寄せられたものを見て、この日の朝に決めました。こんなふうにはたくさんの食材がつくられて、みんなでそれをバイキングのような形で食べることができましたし、ここに学生さんのボランティア、近所のおじいちゃん、おばあちゃんといろいろな人たちが来てくださいます。

そして、これがしゃいん食堂です。医療ガス会社が最初でしたが、企業の申し出があったときに、食べる前にガスの実験をお願いし、ガスでシャボン玉を凍らせることや、炭酸のみそ汁をつくるなどしました。炭酸のみそ汁といったとき、近所のおじいちゃんとおばあちゃんがわあっと言いましたが、食べてみると結構うまみが強調されておいしかったです。また、食堂の近くには株式会社ベアレン醸造所があり、ビール工場の工場案内をしてくれ、そこで容赦ない子供たちの質問が飛び、どうして大人はお酒飲むのと聞くと、子供

は一日 300 回笑うけれども、大人は 15 回しか笑わないから、たくさん笑いたいからなど、どうして苦いのに飲むの、何で苦いことを知っているのかなと思いつつ聞くと、舌が変わるのだよと言いました。舌が変わるということは、生えかわると聞くと、生えかわらないけれども、小さいときからいろんなものを食べていると味覚が豊かになって、こういうものもおいしいとなるよ、お得だよ。だから、小さいときからいろいろなものを好き嫌いしないで食べてと、うまく言ってくれました。企業や地域の人に言ってもらおうと、親とけんかしながら言うよりはずっと子供たちが聞いてくれます。

地域に本当に古い染物屋があり、こども食堂ののれんもつくってくださいました。藍染という伝統的なものが地域にあり、何十年も何百年もこの地域でつくっているというのを自分たちで体験しました。また、空調会社については、空調についてどういった説明するのだろうと思ったのですが、その後のペイント教室を一緒にやるなど、企業の方たちがいろいろな趣向を凝らして仕事を説明してくれ、こんな会社があり、こんな地域貢献しているということを知ることができました。

去年の 3 月 11 日に、あえて震災復興、地域づくり、まちづくりこそ地域づくりと考え、子供を真ん中にした誰もが参加できる共生社会の実現ということで、こども食堂の取り組みを真ん中にしたシンポジウムを開いたところ、全国から 370 人の方が来てくださいました。北海道や関西からもいろいろな方が来てくださって、本当にいいお話を聞くことができました。

これはしゃいん食堂で、鶏とか卵の鶏卵会社の方が招いてくださって、自分たちでお弁当をつくってピクニックをしてきました。あとは、浴衣です。夏になると盛岡は浴衣をみんな着ます。5 人いるシングルマザーのお母さんが、みんなでそろえるのは難しいといていました。その方はいろいろな被害に遭われて逃げてきた方ですが、ではということで地域の人に声をかけたところ、浴衣がたくさん寄附されて、みんなで浴衣を着て短冊を書きました。短冊にはいろいろな子供たちの願いがあり、成績が上がりますように、お母さんの病気が治りますように、お母さんがお金持ちになりますようになど子供たちの声がたくさん下がっていました。

もう一つが、プログラムにボランティアで来てくれる大学生のがくせい食堂を入れました。大学生となかなか接する機会もなく、大学進学の場合は岩手の進学率が高いわけではなく、大学はどういうところかというので逆に岩手大学にお邪魔して、みんなで学食に行ってみました。そして、学校の中を探検すると、わあ、大学ってすごいな、大学っておもしろいな、お兄さん、お姉さんって格好いいな、僕もこの大学に入りたいと言ったら大人の出番です。どういった支援が必要で、どういった制度があるのか、例えば奨学金というのは実は借金であることや、奨学金なしでどのような入り方ができるのか、いろいろなことをみんなで知恵を集めてやるのが大事で、こういうときは父子家庭も来てくれます。父子家庭はなかなか相談会に来ないです。男の人たちは、人と一緒にというのはなかなか難しいですが、こういったイベントに父子家庭が来てくれることがすごく大事です。学生

たちと子供たちの交わりがおもしろく、学食で前の人たちがとっていく際に、自分もセルフでとっていくと、前の人がとったものを自分もとらなければならないと思い、最初にとった人と同じものを子供たちが持っていく。いや、そうじゃないよと言うなど、本当におもしろいと思って見ていました。

流しそうめんがしたいと言ったら、近所のおじさんが裏から竹を割って、長い流しそうめんができました。しゃいん食堂シリーズで盛岡グランドホテルが協力してくださりテーブルマナーを教えてくださいました。テーブルマナーというのはナイフとフォークではなくて、同じテーブルの人と楽しくお話をすることだよ、人の嫌がる話をしないことがマナーだよと一番大事なことを教えてくださいました。そして、お茶、ケーキセットの食べ方、ケーキセットなどお茶の飲み方は大人になってもいろいろな人とかかわる場面があり、美しく飲むことや、マナーとして勉強し、学び、わかるということは子供にとって財産になります。将来は子供を守るドクターになりたいという団体がおり、このときは岩手医大の学生たちがボランティアで来てくれました。

こういったこども食堂などの場は、社会的家族機能と呼んでいます。家族がいい悪いではなくて、どんな形があってもいいです。それを全てみんなが出し切り、力を出して支え合っていけばよく、いろいろな多様性を認め合わないで成り行かない社会になっていきます。地域から困っている子供や親が一人でも減ることや、地域に子供のための活動が一つでもふえることは、全ての人にとって、生きやすい地域と未来になることと私たちは思いました。子供の生きにくさというのは、実はこの未来と地域、岩手の人、全ての人の子の生きにくさで、イコールです。ひとり親家庭の貧困は、この社会の課題が凝縮された姿です。スティグマにならないよう子供が真ん中の地域づくりをすることが子供の貧困対策ではないかと思っています。ひとり親家庭と子供の生きにくさを解消し、誰もが生き生きと暮らしていけるよう、岩手が包摂のモデル、福祉のモデルになるような復興を目指して活動していきたいと思っています。以上でお話を終わります。ありがとうございました。

〔拍手〕

○**佐々木努委員長** 大変貴重なお話、ありがとうございました。

それでは、これから質疑、意見交換を行いたいと思います。ただいまお話をいただきましたことに関して、質疑、御意見等ありましたらお願いします。

○**佐藤ケイ子委員** 私がお話を伺ったのは3回目かと思います。ラジオなどに出ているときお聞きしたことがあり、いつもすごいとお聞きしました。こども食堂ですが、他の県では市段階や県段階のところもあるのですが、こども食堂の開催情報で、週何回行っているとか何の日に行っている、どこのエリアでやっているなど、情報紙を出すことや、食材費の提供を行政で行っているところもあります。岩手では、全部ボランティアで行っていると思っておりましたが、行政の支援はどの程度必要なのかと思っています。行政がお金を出すと、実績を求められ、食品衛生法を守れということで面倒くさいという話も聞こえてくることもあり、さまざまな課題があるとお聞きしています。行政の支援はどの程

度あるべきなのか、どういうお考えかということをお聞きします。

それから、地域でこども食堂をやってみようという声もあるのですが、現実的にどうするとなり、週1回、月1回、月2回のどれがいいのか、どの程度だったらできるかと、お金の面とスタッフの面で悩みが多いのが私たちのところで、今度社会福祉協議会でも音頭をとってやってくれそうですが、どういったタイミングでやるべきというのがあればお聞きできればと思います。

○山屋理恵講師 こども食堂は定義もなく、行う団体も決まりがありませんので、岩手でも私たちのようなNPOが行っているところもあれば、民生委員が集まってやっているところや、支援員たちや、おじいちゃん、おばあちゃんが自分のおうちのキッチンを開放して行っているなど、いろいろで決まりはありません。ただ行っていく中で、何か問題が出てくることになる、こども食堂全体がバッシングされないようにと思い、保険を掛けることや、最低限の衛生面はみんなで勉強したと思います。何かあったときのために、そういった勉強と、保険を掛けています。そういった最低限の保険や衛生、必要な仕組みや対応を勉強する機会を持てるような研修会などに関して行政からそういったお金やバックアップがあればいいと思います。

食材について、岩手は支援してくださる方や野菜とかお米とかもいただけるし、フードバンクもあるので、そういったところは利用できるかもしれませんが、一番子供たちの応援したい生ものや魚、肉の提供は、神経も使いますし、フードバンクでは扱っておりませんから、そういった最低限のものを確保できるお金が必要かと思います。

あとは、個人情報を守ることと思っています。私たちは個人情報に対する保険も掛けており、一番保険料にお金がかかっているのですが、ここに来たことを絶対外にはしゃべらず、誰が何を言ったということをししゃべらないことをボランティアに一筆書いてもらっています。この一、二年岩手でやって、最低限の子供たちを守るということを勉強する機会の仕組みと支援は行政にやっていただきたいと思いました。それがないと、それぞれ好き勝手にやっていることで、口も出せず、そんなことうちはいいわと言っても、心配だと見ている人たちも出てきています。だからといって横並びにするくらいまだ育ておらず、そこに行政も入っていただいて、しっかりやっていきましょうという後押しが必要ではないかと思います。お互いだと言いつらい場合もあり、ボランティアでやっている方もいらっしやるので、行政が入っていただいたほうが私たちもありがたいと思っています。

あとはスタッフについてです。子供をあやしている近所のおじいちゃん、おばあちゃんが何かあるとかわいそうに、お母さんこんなに働いてと悪気がなく言うことがあります。傷つけようとしているわけではないのですが、お母さんはそこを何とかしたくて頑張っているのと思います。そういった現状や、こういったことを気をつけましょうという勉強会や研修会を私たちひとり親支援の養成講座では言っているのですが、そういった場面が必要で、そういった勉強をしましょうという疑問が出てくればいいです。私はボランティアだから、自分が楽しければいいという方たちもいらっしやいますが、そうではなく、そ

ういった人たちを守るために何が必要かという意識づけの何かがあればいいです。これは制度ではなく、本当にどういったようにみんなで共有していくかということは難しいと思っています。

ある程度資金が必要と思います。ボランティアは責任がないこともあり、急にキャンセルしてしまうと、残ったスタッフが大変ということもあり、まじめにやろうとすればするほど仕組みが必要になってきます。それをどうつくっていくかが課題になっており、最低限必要なものだけ行政と一緒にいき、あとはそういった人たちがネットワークをつくり、機会をもって育っていくしかないと思います。これは、地域から起こってきた大事な市民活動です。上からおりてきて、やりなさいというものではありません。子供があつて地域から発生したものだからこそ、大事にゆっくり育てていかなければならないと思っており、その仕組みづくりにぜひ行政も、ではお金出すから、いいでしょうではなく、この地域どうすると一緒に話し合う場に一緒に参加してもらい、つくっていくというスタンスでいてもらいたいと思っています。

○佐藤ケイ子委員 インクルいわてさんは、週1回、月何回など、こども食堂の開催回数、ベースはどうなっていますか。

○山屋理恵講師 お手元のチラシにあるのですが、月に3回で、そのうち1回は個別にじっくり話をすることや、生活習慣を身につけるインクルステーションという形にしています。あとの2回は小さいこども食堂に誰でも来てくださいという形で3回実施しています。これを一生懸命やって、生活はできないので、スタッフなどみんな働きながら、時間などいろいろなものを持ち寄ってやっています。大きな企業からの寄附などがあればいいのですが、それもひもつきで、被災者支援で使ってくださいとなると、被災者ではない人の割合や、いろいろなことが出てきており、資金面のやりくりが大変です。うちのことでどこまで何をしゃべっていいか。

○高田一郎委員 先ほどお話の中で盛岡市のひとり親家庭の実態調査の話がなされました。91%の方が就労しているということですが65%ぐらいの人たちが所得15万円以下という話がありまして、多くの人が頑張っているのですが、収入が少ないということと、子供たちと向き合う時間がないということで、子供の貧困対策は就労支援や居場所づくりは非常に大事だと感じました。

先ほどの就労支援の中で包括的な云々とありました。例えば岩手で実践する場合にイメージがちょっと湧かないものですから、どういったイメージで取り組んだほうがいいのか、NPO法人なのか行政がやったほうがいいのかという、その辺をお聞きしたいと思います。

また、先ほど山形県の例を示して、ひとり親世帯に対するワンストップサービスが必要だという話がありました。これは、県の担当課でお話しすると、岩手県もいろいろやっており、一般社団法人母子寡婦福祉連合会にさまざまな事業を委託し、いろいろなサービスをやっているという話をされましたが、山形と岩手の違いというのは何なのか、山屋さんがイメージするワンストップサービスというのはどのようなイメージなのかということも

お伺いしたいと思います。

きょうのお話を聞きますと、高齢者には地域包括支援ということで、高齢者を支援するためのいろいろな人たちが集まり支援をするといったことがあります。子供たちは未来を担う方々ですから、子供たちに対しても高齢者と同じような包括支援があるべきではないのかと思うのですが、山屋さんの御意見をお聞かせください。

最後ですが、こども食堂についてです。私も一関で取り組んでいるこども食堂を見学して、こども食堂の役割というのは大きいと思います。先ほどの質問と関連するのですが、全県に広げていくために、岩手県は行政としてどういったかかわりをしたらいいのか。滋賀県では、300カ所も広く取り組んでいるという話を以前聞いたことがあります。行政主導ではだめだという話もされましたので、立ち上がりの支援など全県に広げていくためにどう行政はかかわってくるといいのかというところをお聞かせください。

○山屋理恵講師 ワンストップサービスのことと就労支援のことですが、ひとり親家族等就業自立支援センターが岩手県福祉総合相談センターにあります。その一般社団法人岩手県母子寡婦福祉連合会にすてきな方たちがいらっしゃいますが、そこでもスタッフの方たちの高齢化に悩んでいらっしゃいます。若いお母さんなどがたくさん来てくれればいいのですが、なかなか若いお母さんたちが参加せず、利用率が10%もなく、5%から7%ということから考えると、若いお母さんたちが参加しやすく、連合会に入りやすい仕組みづくりをやっていかないとなりません。連合会は、戦後に夫を亡くした方たちの団体で、解散している地域も出てきてしまっているのですが、その方たちと一緒にできたらいろいろなことを学べるはずで、あるものはちゃんと使えばよく、それが現状と合っていないのであれば、そこをうまく若い人たちと一緒にやれるような仕組みを一緒につくったほうがいいと思います。ただの就業支援センターにもなっており、パソコンの訓練の案内をすることや、ハローワークの資料も置いてあるのですが、そこをもっと活性化し、一步踏み込んでお母さんたちの悩みを抱えながら、さっきのような仕組みが入っていったらいいと思います。厚生労働省で今あるものにワンストップサービスという新しい仕組みをつくったからこそ、そういったセンターと一緒に一つにしてしまい、実施させるということがお母さんたちの改善になっていくと思います。今あるものとさらに新しい仕組み、そして若いお母さんたちが入る仕組みのセンターをつくるのが私にはいいと思います。今あるものだけと言ってしまうと、お母さんたちがタイミングを逃がすと来られず、何より月曜日から金曜日の9時から5時という普通の行政の窓口では、休めず、行くとなると駐車場もかかり、仕事も休まなければなりません。何回か通うとなると収入も減り、行っても資料の提供だけであれば行ってもしょうがないと思ってしまうようなことがないよう、例えば土曜日の夜に開催するといったこと。今のお母さんたちの働き方や状況に合わせた、仕組みのあるワンストップセンターで、午前中はなかなか行けないのであれば、例えば大胆に午後1時から9時までにしてしまうことや、土曜日や日曜日もあけるなど新しい仕組みのセンターをつくれれば他の県に負けない、すてきなものができるのではないかと考えています。

あと、子供の包括支援センターは本当に必要です。だからといって、高齢者にくっつければいいという簡単な問題ではなく、さっき言ったようなスタッフの人たちがちゃんと学び、スキルを身につけ、子供を真ん中にしたセンターにしなくてはなりません。高齢者とかかわらせたいから、一緒にしてしまえばいいというのは乱暴な話で、意識改革などいろいろな勉強をやらないと、さきほど言ったような二次被害、三次被害を起こしてしまいます。子供を真ん中にしたそういったセンターは必要だと思います。もし難しいのであれば、そういったセンターをこども食堂のような機能にくっつけることもいいと思います。必要だと思います。今まで高齢者や障がい者の部分に関して力を入れてきたものを転換し、お金のつけ方と制度の仕組みも若者世代や子育て世代のためのセンターをつくっていくという形にして、そこに地域の高齢者の人たちなどが来られるという形が、子供が生き生きするのではないかと思い、そういった仕組みがあったらと思います。

こども食堂の取り組みで滋賀県に行ってきたのですが、300カ所の各団体に10万円ずつなど渡し、行っている団体の色がいろいろあり、おもしろいです。ただ10万円以上は寄附などで団体ごとに差が出てきてしまい、その差によってあそこはいいけれど、あそこはだめといった変な競争みたいになってきているような話を聞いており、難しいと思います。大阪府堺市のように一つの団体にこども食堂を広げるためのセンター、おっしゃったみたいな形で仕事を行い、研修などをしてくださいとやっていくほうがきれいに広がっており、問題も集約してみんなで話し合う体制がとれており、いいのではないかと考えています。そのために専用のスタッフが必要で、個人情報を守るという形をつくる団体や仕組みがないと難しいと思っています。

各自治体もいろいろこども食堂の取り組みが県ごとに競い合うというか、出てくるような形になり、あそこはいいね、ここはいいねというような、これからの新しい仕組みづくりが動き出しているという感想はあります。

愛知県も、きのうかおとといに県が支援をするという仕組みをつくったという情報もニュースで流れていました。さっき言ったようにスタートラインです。子供の貧困も食堂も、地域からいろいろな人たちが上がってくるから、試行錯誤しながら行きつ、戻りつだと思います。失敗することもあるかもしれないし、本当にいろいろなことが起きますが、そこを乗り越えないと次に行けないので、それを含めとにかく必要だということで、一歩踏み出し、いい話だった、必要だ、ということで終わるのではなく、ではこうしましょう、寄り添うだけではなく、その輪に入りましょうということを動かすことが今一番大事だと思います。ここの地域でこうしましょうと具体的に動かし、市町村や県が実際動いてみるのが大事だと思います。悩んでいる時間もなく、とまっている時間もないので、そういった形で施策が進んでいけばいいと思っています。

○高田一郎委員 私が一関のこども食堂を見学したとき、高校生がボランティアで子供たちの勉強を教えていました。そして、高齢者も参加し、昔の遊びを教え、親御さんたちはボランティアで食事をつくっており、そういった姿を見て非常に大事だと思います。そう

いった中でひとり親の親御さんがいろいろな悩みをそこで打ち明けて課題を解決するという方向に進んでいけばこども食堂というのはますます高まると思います。ただスタートラインに立っているという話ですが、今の話を聞いて、実践してうまく改善していくということしかないと思いました。そういった中でインクルいわてさんの役割は大きくなっていくと思いますので、頑張ってくださいたいと思っております。

○山屋理恵講師 先生方はぜひワンストップセンターを岩手で作ってください。多分日本一のセンターになると思います。地域の人たちの思いなどが本当にこのようになる県なので、それは子供たちの支え手になるいい仕組みになると思いますから、それはぜひ検討していただきたいと思います。

○高田一郎委員 子どもの貧困対策推進計画も、県、全国でつくりましたし、岩手県も平成 28 年の 3 月につくったのですが、その中で見ても国のマニュアルどおりにつくっており、5 年間の計画ですが、中身のない計画になっています。評価は違うと思うのですが、新年度に子供の生活実態を調査することを県が明らかにしており、実態調査に期待をして、今後の施策の展開に期待したいと思います。沖縄県では独自に貧困率を出して 29.9%で何年後には 10%減らすという高い目標と決意で動いて取り組むということが大事と思うのですが、今後の岩手の貧困対策を進めていく上で県に対し、こうあるべきだという提言があれば、教えていただきたいと思います。

○山屋理恵講師 先生方の前で本当にどうしゃべっていいかわからないのですが、子供支援は、地域づくりと未来の万能薬とタイトルのとおりで、県の第一施策として子供支援を前面に持ってきてほしいです。それは復興支援と同じくらい大事です。復興はまちづくりで、子供支援もまちづくりです。実は一人一人が我が事だということを岩手県が打ち出してくれたらどんなにいいかと思います。県全体で子供を見守ることが県民の皆さんがわかってくれると思うので、ぜひそういったフレーズを県民の皆さんに出してほしいと思います。

本当に子供を大事にして真ん中に置くことが自分のことになるという施策を県が真ん中に打ち出し、知事が言ってくださったらすごくありがたいと思います。そうすると、みんながそうかとなると思います。皆さん一人一人がそれぞれ自分の生活や生きることで精いっぱいな時代だと思います。子育てが急がば回れで自分たちの生活と未来を豊かにすることなのだと思ってくれればいろいろなことが変わってくると思うので、そういったキャッチフレーズでもいいので岩手県さんが打ち出して言っていただきたいといつも思います。具体的な案はあれですが、そうなればいいと思います。

○佐々木努委員長 ほかに、あとお一人、お二人くらい。

○名須川晋委員 私は、平成 28 年度活動実績のインターシティミーティング花巻で、花巻ロータリークラブが主催した際に拝聴させていただきました。以来まだお伺いをしていないことを恥じておりましたが、ぜひとも今度 1 月のこども食堂に行ければと思います。この中で、御説明いただければ恐縮ですが、小学生のお子さんがどんどん大きくなり、

中学生、高校生、あるいは大学生になっていく中で、その生活環境や、それぞれのお子さん方の悩みなどいろいろ変化があると思うのですが、これについてはどのように対応していくのか。そして中高生になると学校があり、クラブ活動があるということで、なかなかこども食堂やインクルいわてさんが提供しているこういったメニューになかなか参加することも難しくなってくると思うのですが、そういったことについてどのように対応されていますか。

○山屋理恵講師 子供たちの成長においてということですが、ひとり親になる確率が高くなるのが9歳からです。岩手県のデータを見ると小さいときより、3年生、4年生ぐらいからひとり親になる率もあります。全国的な数字ですがそのころから子供の貧困が上がるということは、そういったのも合わさっていると思います。小さいときの教育は必要というデータもありますが、小学校の中期の変わり目の見守りや支援体制、相談などを強化しなければならないと思っています。こども食堂は小学校に密に周知し、学校の養護教諭の先生にも声かけをして、養護教諭の先生が自分の心配なお子さんをこども食堂に連れてくることや、沿岸の校長先生が心配とって連れてくるということもありました。そういった教育関係の人たちに周知していただき、そのかわりにみんなで見守るということも、もしかしたら仕組みとして必要かと思えます。

中学校、高校生は、なかなか部活などが忙しく来にくいです。例えば、学校の帰りや行く間に寄って御飯食べてくることや、帰りに食べていくことなどが必要だと思います。受け入れる側と実施する側は、夜の何時までということではなく、いろいろな体制を持たなければならないという覚悟でそういったことをやっていけたらいいと思います。私たちもこども食堂をやるときに何曜日がいいか試行錯誤しました。午前がいいかというのを全部試してみて、一番声が上がったのが日曜日の夕方でした。私たちは金曜日の夜にここに来て、お母さんたちが仕事の帰りに寄り、子供たちも学校の帰りに寄って一緒に御飯食べ、その間に子供たちが勉強も隣で教えてもらい、お母さんの悩みが何かあれば隣で相談して悩みを解決し、帰って寝るだけにしたらどんなにいいだろうと思いました。

夕方の6時から9時を魔の時間と呼んでおり、預ける先が閉まってしまう、子供の預け先もなくなってしまいます。お金があれば塾などへ行けるけれど、お金もなく、その時間をどう過ごすかということが大事で、その夜の時間にこども食堂をできたらいいと思いますがお母さんたちがなかなか帰りません。しゃべってなかなか終わらず、子供たちもすぐうれしくて盛り上がり帰ろうとせず、夜遅くなってしまうこともあります。それが毎日であればそろそろ帰ってと言えますが、月に何回かしかできていない状況で、せつかくだからもっとしゃべって行ってとなってしまう。毎日コンスタントに時間を決めて夜にやるのかについては、今でも予算的なもの、人力的なものは始まったばかりで、月に何回かやっただけで精いっぱいです。そうであれば、日曜日の午後であれば結構ゆっくりしゃべることができるなど、毎回のことではないので日曜日の午後になっております。予算がつけば毎日夜にやって安心して帰り、寝るだけで親子の時間をつくるという形がベスト

だと思えます。それができないのであれば、日曜日の午後にしっかり話を聞き、部活がないときなどに子供たちがゆっくり寄り添って勉強を教えてもらうなどの時間があればいいと思っています。

参加しに来るということではなく、うちは中学生も高校生も来てくれています。その子供たちが就職して、今度はボランティアとして来てくれるとき、成人式のときなどにおかげさまでと晴れ着を持ってきて見せてくれるなどの循環があると、子供たちも僕も大人になるとあんなふうに大きくなれるのかなといった夢も出てくるので、途切れないほうがいいと思います。自分の兄弟しか見られないとなると、兄弟が少なく、大きくなるというモデルがないからイメージできないのですが、どんな年代の子もここに集まって成長を見るといったことができることもいいと思うので、いろいろな世代が来やすいような工夫をこっち側がつくっていくということが大事で、それをするにはその人たちの声を聞くしかありません。こっちがこうと言ってもだめで、その人たちからちゃんと声を聞き、何時がいいとかいうのはちゃんと聞くということを繰り返し、試行錯誤してつくっていくしかないと思っています。今のところはそのような感じでやっており、年代を途切れさせないようにしています。教育委員会、学校の力というのはすごく大事で、特に養護教諭の先生の協力というのは大事です。そちらの協力を仰ぎながら地域でやっていくということが大事だと思いました。

○佐々木努委員長 ほかにありませんか、よろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 それでは、ほかにないようですので、本日の調査はこれをもって終了いたします。

山屋様には、本当にお忙しいところ、我々の委員会調査にお応えをいただきましてありがとうございます。この委員会では、先日鳥取県に行ってまいりまして、鳥取県は県を挙げて子育て王国ということを打ち出してさまざまな取り組みを行っており、すごく勉強になりました。そういった中で、岩手はまだまだ他県にはおくれており、先ほど山屋様がおっしゃったように県として子育て支援を頑張るということを県民に対して打ち出すことが一番の万能薬になっていくのではと改めて思いました。我々もできる限り頑張っていきたいと思いますので、今後も山屋様初め、インクルいわての方々には先頭に立って、県のひとり親家庭の支援を初め、こども食堂の運営も含めて、県全体を動かしていただきたいと思いますので、どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

もう一度皆さんで拍手をお願いします。

〔拍手〕

○佐々木努委員長 委員の皆様には、次回の委員会運営等について御相談がありますので、しばしお残り願います。

○山屋理恵講師 ありがとうございます。

〔拍手〕

○佐々木努委員長 次に、4月に予定されております次回の当委員会の調査事項についてありますが、御意見等はありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 特に御意見等がなければ、当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。